■日　時：２０１９年７月７日（日）

■場　所：立川教会

■説教題：「主なる神の審きと霊の導き」

■聖　書：旧約 エゼキエル書34：1－10（p1352）

新約 使徒言行録8：26－40（p228）

■讃美歌：97「羊飼いの羊飼いよ」482「わが主イェス いとうるわし」

お早うございます。

今日与えられた旧約聖書のエゼキエル書の御言葉は、牧者に対する厳しい警告が記されています。その一方で、新約聖書の使徒言行録の御言葉は、それまでのユダヤ教を土台としたユダヤ社会の価値観、即ちユダヤ民族が誇りとしていた選ばれた民としての選民思想を打ち破り、福音はユダヤ民族を超えて異邦人にまで及ぶ事を初めて記した記事です。即ち、前者は牧者に対する厳しい審きの預言であり、後者は異邦人に対する救いの証しです。このエゼキエル書と使徒言行録の記事との間に、どのような関わりがあるのでしょうか。

まず、エゼキエル書から見て行きましょう。

預言者エゼキエルが活躍した時代は、預言者エレミヤとほぼ同時期にあたり、北王国イスラエルに続き南王国ユダが滅亡し、イスラエル民族が捕らわれの民としてバビロニヤ帝国に連れ去られて行く前後にあたります。そして、この34章は、捕囚の地のバビロニヤで書かれたと言われています。

ここで牧者と呼ばれているのは、南王国ユダの政治的社会的指導者でした。彼らがどのような振る舞いをユダの国においてしていたか、又捕囚の地でもしているかが語られます。

それは、

1. 群れ、即ちユダの民を養うべき務めを負っていたにもかかわらず、その務めを放棄して自分たちだけが「乳を飲み、羊毛を身にまとい、肥えた動物を屠っている。」
2. 弱い者を助けず、病める者を癒やさず、傷ついた者の手当てをしなかった。
3. 民の中から、脱落する者に憐れみを施さずに放置し、去って行く者を去るがままに任せ、力づくで民を支配した。

そのために見よ、

1. 民たちは、為政者がその務めを怠ったが故に、国を失い、住む所を奪われ、異国の民の支配下に置かれ、亡国の民となった。
2. 散らされ、見捨てられ、住むべき所を探し求めて、今なおさ迷い続けている。

それ故にこそ、主なる神は言われる。

1. 南王国ユダの政治的社会的指導者であった者よ、私はお前たちに二度と民を渡さない。お前たちは、私の愛する民を飢えさせ、弱り果てるままに捨て置いた。
2. そして、今や、亡国の民として地の果てにまで散らされて行こうとしている。
3. しかし、私は、決して彼らをそのままにはしておかない。彼らに救いの手を差し伸べ、お前たちの手から取り戻す。

つまり、預言者エゼキエルを通して語られた神様の御言葉は、北王国イスラエルの牧者も、南王国ユダの牧者も、主なる神ヤハウエの戒めに背き、民を守り、養うことを放棄したことへの審きの預言でした。お前たちに民を二度と任せることはしない。私の手に取り戻すと。

私の手に取り戻すと言うのは、牧者に対する決別の言葉であり、民たちは、牧者ではなく、神にのみ直接養われることへの宣言でした。それは、最早、イスラエルの民たちを治める者は与えられず、従って、住むべき国は無く、散らされたその地において、ひたすら一人ひとり、神にのみ依り頼む民となることを意味したのです。

次に使徒言行録です。

この記事は、使徒フィリポと異邦の国エチオピアの高い地位にあった宦官との出会いを記しています。異邦人でありながら、エルサレムに礼拝に来たと言うことは、この宦官が「神を畏れる者」、つまり信心深い者であったことを明らかにします。しかも、この出会いは、福音が異邦人に伝えられ、救いの道が開かれた最初の出来事です。

ここで注目すべき言葉があります。26節です。フィリポに異邦人伝道を促したのが、「主の天使」、即ち神様からの使いであることです。「主の天使」とは、聖霊による導きを意味します。神様から遣わされた聖霊の導きによって、フィリポはエチオピアの宦官に洗礼を授けるのです。

それは、人間としての自分の意志ではなく、神様の導きだと言うことです。

神様の独り子であるイエス様の十字架の罪の赦しの贖いは、宦官に対する洗礼が授けられた瞬間、選ばれた民であるイスラエル民族を超えて、異邦の民にまで、つまり全世界の人類にまで及ぶ事を意味しました。先のエゼキエル書における神様のイスラエル民族に対する審きは、一方で救いが今や主イエス・キリストを救い主と信じる全ての人に及ぶ福音へと変えられました。神様の憐れみと恵みは、ユダヤ民族だけに及ぶと言う旧い約束の時代が終わり、救いは全人類に遍く及ぶ新しい約束の時代の訪れです。

ここで私たちは、それでは私たちに告げ知らされた福音とは何かを、もう一度考えなければならないと思うのです。それは、神様が、私たちに期待されている生き方です。

手がかりとなるのが、エゼキエル書です。

神様は、なぜ、イスラエル民族を、選ばれた民から亡国の民にしたのかです。

もう一度、神様の裁きの言葉得を見てみたいと思います。

神様が牧者を裁いたのは、

1. 群れ、即ちユダの民を養うべき務めを負っていたにもかかわらず、その務めを放棄して自分たちだけが「乳を飲み、羊毛を身にまとい、肥えた動物を屠っている。」
2. 弱い者を助けず、病める者を癒やさず、傷ついた者の手当てをすらしなかった。
3. 民の中から、脱落する者に憐れみを施さずに放置し、去って行く者を去るがままに任せ、力づくで民を支配した。

からです。

この時、私に思い浮かぶ聖書の箇所があります。

皆さんも良くご存知のマタイによる福音書第25章31節以下です

【マタイによる福音書25：31－46、p50】

「すべての人を裁く」と小見出しにあるこの箇所は、先のイスラエル民族が亡国の民となったその理由を見事なまでに指摘しています。特に、イエス様が教えられた第二の戒めである隣人を愛せよとの具体的な在り方です。

私は、ひるがえって、全てのキリスト者に問われているのは、この御言葉を貫いている隣人愛の生き方であると思うのです。さらに言えば、私たちが人生を送る一切の価値判断の基は、政治的選択にしても、社会的選択にしても、経済的選択にしても、その基準はこの第二の戒めにあるのではないでしょうか？

私たちは、ここに、この価値基準に立って、政治・社会・経済・文化など、私たちの生活に関わる一切の在り様を問わなければならないと思うのです。

昨日行われた料理教室は、幼児も入れれば13名の参加でした。

レシピは、カレーパンとあんドーナツでした。

集会室のテーブルの上にカセットコンロを置き、フライパンを乗せ、目の前で油であげたあんドーナツとカレーパンは、本当に美味しかったです。

そして思うのです。

料理教室の大変さは、その準備にあります。

前日から人数分の材料をすべて揃えて、2時間以内に終わらせるように手がかかる物は先に準備し、作っておくのです。昨日は、カレーとあんとイーストを入れたパンの生地が準備されていました。

料理教室の先生の労力は大変なものです。にもかかわらず、参加した皆さんに喜んで欲しい、ただその一点で、惜しげもなく料理教室を担当して下さっています。

私はそこに、イエス様の命じられた第二の戒め生きている姿を見るのです。

この間長く主日礼拝にも中国語礼拝にも出席していない方が、料理教室と言うことで夫と一緒に楽しそうに参加していました。

料理教室の意味は、そこにもあるのです。

夕礼拝もそうです。

昼間の、あるいは日曜日の主日礼拝に主席出来ない方が、仕事の合間の休憩を取って出席し、交わりに入る、その大切な機会となっています。

教会から離れていた人が、立川教会の懐かしい歌を歌う集いや料理教室に参加し始めて、再び教会に通うようにもなりました。

私たちは、そこに神様の御業を見るのです。

絶えず、神様の御心を尋ね求めながら、それぞれの賜物を伝道の業のために用いていただけるよう、共に励もうではありませんか。

祈りましょう。